令和８年３月１２日（木）
令和７年度第２回感染対策等研修会

訪問看護対応に関する感染対策の取組事例紹介

医療法人社団亮仁会
さくら訪問看護ステーション　管理者　鳥居香織

本日の内容

●訪問看護の実際

・限られたスペース（自宅）や設備の中での効果的な感染対策

・感染対策の事例紹介

・職員本人や職員の家族に体調不良が見られた場合の対応方法

●今後に向けた取り組み等、訪問看護ステーションとして備えておくべき事（心がまえ）について

訪問看護師が個々に行っている標準予防策

●訪問前の準備：マスクは常時着用・健康チェック
●訪問カバンに常に準備しているもの
　　手袋・ビニールエプロン・靴下カバー・手指消毒剤
●流行時には、廊下側の換気をしながらケアを実施
（現在は、ケア時には温度の調節やプライバシー保持の為ドアを閉めたり、襖を閉めたり。）
●ケア時に出たごみは、持ち帰らず利用者宅のゴミ箱へ
●ケア前後にはアルコールで手指消毒！

訪問看護の事例

標準装備です。

出番は減りましたが、まだまだ油断できません！

定期的に感染対策の研修を行い、感染に対する意識を常に持ち続けています。感染から利用者や自分自身を守るために必要な研修です。

あるある事例：
訪問したら利用者が発熱していた

- Aさん　８０代後半
- 診断名　脳梗塞後遺症
- 状況　　要介護５　全介助状態
  神経因性膀胱にて尿留置カテーテル挿入
  時々尿路感染症を発症し、発熱することも多かった
- 家族歴　娘夫婦と３人暮らし
- 利用しているサービス
  訪問診療月１回　　週１回　訪問看護（身体の清潔・尿留置管理）
  週末はショートステイ利用

＜経過＞

通常訪問にて伺う。

玄関先で「昨日、ショートステイから帰宅して、特に普段と変わりなかったのに、夜になって３９℃の熱が出たの。」と娘さんより話がある

主治医へ連絡。往診で対応。コロナ陽性が判明した

訪問看護師の対応

①訪問時には、マスク着用は通常だが、一度退室し、
マスク、アイガード、長袖エプロン（使い捨て）靴下カバーを再着用
②ケア内容を家族と相談（状況によりケアを回避することも）
③ケア時間の短縮と滞在時間の短縮
④換気の工夫
⑤利用者様の状態把握
　コロナ・インフルエンザ等の上気道感染なのか？尿路感染？
　便秘によるもの？
⑥状況を主治医及びケアマネジャーへ報告
⑦必要時に看護師の勤務調整や訪問調整→体調の変化に注意！
⑧家族への指導も忘れずに！

お願い

感染症が流行する季節となりました。感染拡大防止の強化のため下記の項目についてご協力いただきますようお願い申し上げます。

ご本人様、ご家族様は、朝ご自宅での体温測定と、訪問時のマスクの着用をお願いします。

３７．５度以上の発熱がある場合は、朝のうちにご連絡ください。

その場合訪問を一時休止、または回数や時間の変更調整をお願いすることがあることをご理解、ご協力いただきたいと思います。

さくら訪問看護ステーション　　TEL０２８７－２９－３２５２

家族への指導も忘れず
なかなか浸透しない「事前の検温と連絡」

- 訪問看護ステーションでは、利用者様へ「お熱があった場合」「ご家族が熱を出したり、インフルエンザやコロナと診断された場合」などにはご連絡をお願いします！というお知らせを出しています。
- 訪問看護は原則一人でケアをするため、利用者との距離をは保ちにくく、密着は避けられない！
- 以前ほど、恐れられていない？コロナ感染症。
- この感染症が引き金になり、寝たきりになってしまったケースも！
- コロナ感染症が第５類になったことで、意識の変化を感じています。

事例②
職員本人や職員の家族に体調不良が見られた場合の対応

・体調不良があり特に発熱などの症状があった場合、速やかに
医療機関を受診を心がけ、自らの訪問は避けることが好ましい。
・家族に体調不良が見られた場合も同様であるが、本人に症状が無い
場合は、職場のルールに従い対応。
・管理者は、訪問のスケジュール調整を実施します。
・訪問看護師が感染源とならない為に、睡眠、休養、食事など
日ごろから健康管理をします。

平常時の対策として、ケアの必要度分類を実施。場合によっては、訪問を延期したり、電話で健康管理をするなどの工夫が必要となります。

せめて、発熱時には知らせて欲しい！

- 訪問看護ステーションでは、注意喚起を促すために①本人及び家族が発熱時②家族がコロナ・インフルエンザなど感染症を発症した場合には事前に連絡を要請。③訪問時には、マスクを着用の旨のご依頼を文書作成し、各家庭に配布しています。
- しかしながら、ご本人がマスクを着用してくださるのは、半数以下。看護師がスタンダードプリコーションを徹底しても、そもそも、家の中でマスクをする習慣が無い高齢者の理解を得るには難しいのが現状です。

コロナ蔓延を経験した今だからこそ。

- コロナが大流行し、正体がつかめなかった頃。発熱している利用者をみて（コロナかもしれない）と思いながら、辛そうな利用者を助けるべくケアし、自分が感染してしまうという事がありました。
- 沢山の情報が錯綜し、（本当に、この予防策で良いのだろうか？）という不安が長い時間が経過しました。
- その中で、どのような感染症においても、マスク、手袋、ガウン着用、ケア前後の手洗い、うがい、ケア毎のアルコール消毒が有効であり、原因不明な感染症でも、標準予防策を徹底し、自分が感染しない事が自分と利用者を守る一番の近道であることがわかりました。

今後に向けた取り組み
平時の準備が我が身を助ける

- 平時の準備の中で、物資の供給、情報収集と共有と分析を常に心がけることが重要です。（1週間に必要な手袋、マスクの枚数や在庫管理などの実践）
- 感染症がまん延している施設があるのかを把握する事が難しくなった今、ケアマネジャーと連携を密にして情報の把握に心がけています。
- 新聞にも常に目を通し、感染症についての情報を収集します。
- コロナが他国で発症し、日本へ伝播してきたように、今後どんな新しい感染症が起こるかは予測できません。

訪問看護師が心がけているもの

- 突然の発熱に対応できるよう訪問車には、感染対策グッズが準備されています。
- 発熱した利用者を前にしても、優先順位を考え、「今必要なケア」を提供または、「提供しないで戻る」という勇気も持ち合わせることができるようになりました。
- 的確な判断と多職種との連携も忘れません。
- 「訪問したら発熱していた」ということも経験済の訪問看護師。
  訪問は原則一人です。相談する相手もその場にはいません。一人一人が正しい知識を持ち、瞬時に正しい判断をして対応しなければなりません。

最後に

- 感染症には、数えきれないほどのものがあります。
- 感染経路の違い
- 病原体の違い（細菌感染？ウイルス？真菌？？）
- コロナ感染症で学んだことは、

『敵を知り、正しく恐れて正しく対応する大切さ』

- 感染防護具を十分に準備し、感染の循環を断ち切り、

対応の遅れでまん延させないよう手を尽くすこと。

今後も感染に対する知識をアップデートしながら、利用者様のケアを継続して参ります。

ご清聴ありがとうございました。